自然・社会体験が児童の学習への動機づけや自尊感情に及ぼす影響

松本　麻友子[*1]

要　　旨

本研究では，児童の体験活動が心理・学習面に及ぼす効果を検討した．児童の発達的特徴を踏まえ，自己決定理論に基づく学習への動機づけと自尊感情に着目し，小学校高学年を対象に質問紙調査を行った．まず，体験活動の指標について因子分析を行ったところ，生活体験，社会体験，自然体験に分類された．続いて，体験活動と学習への動機づけおよび自尊感情について重回帰分析を行った結果，生活体験は学習への動機づけや自尊感情に有意な影響を示さなかったが，自然体験は学習に対する自律的動機づけや自尊感情に影響することが示された．また，社会体験が自尊感情を高めることが見いだされた．以上の結果から，多面的に体験活動を捉える重要性および学校教育における教科学習と関連づけた主体的な体験活動の充実について論じた．

Keywords：自然・社会体験，学習への動機づけ，自尊感情，小学生
natural and social experience，learning motivation，self-esteem，elementary school students

1. 問題

近年，子どもを取り巻く環境の変化に伴い，日常生活の中で自然や社会との関わりが減少している．国立青少年教育振興機構の調査（2021）によると，平成 10 年から令和元年の 21 年間の小中学生（小学 4 年生，小学 6 年生，中学 2 年生）の「海や川で泳いだこと」や「チョウやトンボ，バッタなどの昆虫をつかまえたこと」，「キャンプをしたこと」などの自然体験について比較したところ，平成 26 年から令和元年にかけて減少傾向にあることが報告されている．また，「ナイフや包丁で，果物の皮をむいたり，野菜を切ったこと」などの生活体験にも減少傾向がみられた．

自然や社会と関わる体験は子どもの成長にどのような影響を及ぼすのか．自然体験の効果に関する研究や報告事例は数多く蓄積されている．例えば，学習面の効果として，全国学力・学習状況調査においては，自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある児童生徒は理科の平均正答率が高く，自然の中での集団宿泊活動を長い日数行った小学校は児童の国語・算数の「活用」に関する問題の平均正答率が高いことが示された（国立教育政策研究所，2012）．また，OECD 生徒の学習到達度調査（PISA：Programme for International Student Assessment）においてもクラブ活動など学校の様々な活動を行っているほど読解力の得点が高いことが報告されている（中央教育審議会，2013）．国外においても各教科に関連づけて環境教育を行なった結果，読解力や筆記力および計算力といった学力以外にも，関係科目に対する関心や熱意が向上したことが報告されており（NEEAC；2005），児童の自然体験の

[*1] 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科

重要性が示されている．

自然体験の効果は学習以外にも波及する．21 世紀出生児縦断調査（文部科学省，2023）によると，家庭の収入水準にかかわらず，小学校 6 年生でキャンプや登山，川遊びなどの自然体験が多いと答えた保護者の子どもほど，20 歳の調査で自尊感情や精神的回復力，精神的健康の得点が高く，体験が少ないほど得点が低い傾向が見られた．また，農業・職業の体験，ボランティアなどの社会体験や動植物園・博物館・美術館の見学，音楽・演劇の鑑賞，スポーツ観戦などの文化的体験についても同様の結果が得られている（文部科学省，2023）．さらに，将来の自尊感情だけではなく，児童生徒の自尊感情（江川・市瀬，2015；正親他，2016）や自己効力感（平野他，2011），自己概念（渡邊・飯田，2005）を向上させることが明らかとなっている．その他にも，wellbeing（Robert et al., 2020）や生きる力（橘他，2003；中川他，2005），社会的スキル（青木・永吉，2003），ソーシャルサポート（中川他，2006）など社会で生き抜くために求められる力を養うことが報告されている．

学校教育における体験活動の捉え方として，学校教育法では，「小学校においては，前条第一項の規定による目標の達成に資するよう，教育指導を行うに当たり，児童の体験的な学習活動，特にボランティア活動など社会奉仕体験活動，自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする．この場合において，社会教育関係団体その他の関係団体及び関係機関との連携に十分配慮しなければならない．」と記載されている．また，小学校学習指導要領（文部科学省，2017）においても，「集団生活を通して協力して役割を果たすことの大切さなどを考える集団宿泊活動，社会の一員であるという自覚と互いが支え合う社会の仕組みを考え，自分自身をも高めるためのボランティア活動，自然や動植物を愛し，大切にする心を育てるための自然体験活動など，様々な体験活動の充実が求められている．各学校においては，学校の教育活動全体において学校の実情や児童の実態を考慮し，豊かな体験の積み重ねを通して児童の道徳性が養われるよう配慮することが大切である．」とされており，発達の段階を踏まえた体験活動の重要性およびその充実が求められている．

このように，教育現場で体験活動や体験学習の充実が指摘されているものの，研究知見は，キャンプなどの自然体験が多く，社会体験や文化的体験を含めた体験活動に関する研究は数少ない（e.g., 横山，2010）．学習指導要領で道徳性の育成を図るような活動が求められているように，自然活動以外の活動の効果についても明らかにすべきである．また，文部科学省（2023）は，児童の自然体験，社会体験，文化的体験について調査しているものの，16 歳～20 歳時点における自尊感情や精神的健康など心理的効果を中心としており，現時点での児童の心理的効果や学習効果については検討していない．教育現場での充実を図る上で，体験活動の意義をより明確にするためには，現時点での心理的効果や学習効果について明らかにすることは重要である．

そこで，本研究では，児童の自然体験やそれ以外の活動を含めた体験活動が，心理・学習面に及ぼす影響を検討する．

なお，本研究では，心理的効果を測定する指標として，先行研究でも多く取り上げられて

いる自尊感情に焦点を当てる．自尊感情は，小学校 4 年生あたりから顕著に下がり始め，男子より女子の方が低く，欧米の児童と比べて日本の児童の自尊感情はかなり低いことが報告されている（古荘，2009）．自尊感情の低い児童ほど抑うつや学校内不安が高く，好奇心・興味得点が低く，挑戦への活動意欲が低いことが見いだされている（e.g., Sowislo & Orth, 2013；竹田・倉戸，2003；Waschull& Kernis, 1996）．このような状況の中，学校教育では自尊感情を高めることが重要視され，特に小学校では頻繁にその試みが行われている．したがって，様々な体験活動における自尊感情への効果を検討することによって，体験活動による介入の有効性や不適応への予防や改善方法を明らかにすることができる．

また，学習効果として，自然体験では成績や読解力・計算力など学力が検討されている（e.g., 中央教育審議会，2013）．PISA の調査によると，日本の 15 歳の学力が低下したこと が明らかとなり，その背景には学習に対する態度や動機づけの変化があることが示唆されている（速水・小平，2006）．さらに，小学生から高校生にかけて「勉強しようという気持ちがわかない」と回答した子どもの比率が年々増加し，特に小学校 4 年生から小学校 6 年生は 2019 年から 20 ポイント以上も増加していることが報告されている（東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所，2023）．また，勉強する理由として「叱られたくないから」という外発的動機づけを持つ小中学生が急増していることも同調査で明らかとなっている．これらの知見を踏まえると，学力の向上より先に，学習意欲を高めることが重要である．そこで本研究では学習効果の指標として，学習への動機づけに着目する．学習に対する動機づけを捉える理論として Ryan & Deci（2017）による自己決定理論（self-determination theory）がある．自己決定理論では，外発的動機づけを自己決定の程度から細分化することで，内発的動機づけとの間に連続性を想定している．外発的動機づけには，統合的調整，同一化的調整，取り入れ的調整，外的調整の 4 つの下位概念があり，実証研究では同一化的調整から外的調整までの 3 つが用いられることが多い（岡田, 2010）．基本的に，内的調整と同一化的調整は自律的動機づけと呼ばれ，学業コンピテンスなど適応変数との関連が報告される一方，取り入れ的調整と外的調整は統制的動機づけと呼ばれ，不適応変数との関連が報告されている（西村・櫻井，2013；西村・村上，2014）．したがって，自然や社会にかかわる体験をし，各教科との関連を見いだすことにより，学習への興味・関心を示すような自律的動機づけが高まることが示唆される．以上を踏まえ，本研究では自然体験等を含む体験が自尊感情や学習への動機づけに及ぼす影響を検討することを目的とする．

なお，仮説は以下の通りである．

仮説 1：自然体験が多い児童ほど，自尊感情が高い.

仮説 2：自然体験が多い児童ほど，自律的な動機づけが高い.

仮説 3：自然体験以外の体験活動が多い児童ほど，自尊感情が高い.

仮説 4：自然体験以外の体験活動が多い児童ほど，自律的動機づけが高い.

2. 方法

2.1 調査対象者

公立小学校 3 校の 6 年生 202 名. このうち, 全てに不備のない回答が得られた 189 名を分析対象とした.

2.2 質問紙の構成

（1）学習への動機づけ：西村他（2011）の自律的学習動機づけ尺度を用いた．この尺度は「内的調整（5 項目)」,「同一的調整（5 項目)」,「取入れ的調整（5 項目)」,「外的調整（5 項目)」の 4 つの下位尺度から構成されている. なお, 本研究では児童の負担を減らすため, 先行研究で各因子に高い負荷量を示していた 3 項目計 12 項目を採用した．回答は「まったくあてはまらない（1 点)」から「とてもあてはまる（4 点)」までの 4 件法で尋ねた.

（2）自尊感情：児童に負担のない項目数で自尊感情を測定するために，青島（2008）が作成した「自尊感情尺度」や Rosenberg（1965）の自尊感情の定義，国立教育政策研究所（2015）の自尊感情の捉え方を参考に作成した.「生きていて価値のある人間だと思う」,「みんなの役に立っていると感じる」,「自分は必要とされていると思う」という 3 項目に対して「あてはまらない（1 点)」から「あてはまる（6 点)」までの 6 件法で回答を求めた.

（3）体験活動：東京学芸大学（2012）による調査項目を用いた．この尺度は一般成人を対象に道徳性の発達に関係するような自然体験や社会体験 17 項目について，子どもの頃に体験した頻度を尋ねるものである．本研究では，体験した頻度を「全くなかった（1 点)」から「何度もあった（4 点)」までの 4 件法で尋ねた．なお，現代の小学生用に表現を一部修正して用いた.

2.3 手続き

調査は担任教諭の指示のもとクラス単位で実施した．質問紙は個別の封筒に入れた状態で児童に配布し，回答後は各自で封をしてもらい回収した.

2.4 倫理的配慮

本研究の概要ならびに趣旨について，調査対象校の学校長および担任教諭に説明を行い，調査協力を依頼した．協力依頼の過程で質問項目の改訂や実施方法の検討を行い， 協力校の理解のもと調査実施の同意を得た. 調査は, 児童の自由な意思に任せることや回答しない児童がいても無理に回答を促す必要はないこと，回答中は机間巡視をしないことを協力校の担任教諭に対して説明した．児童へは調査前に，正答や誤答はないこと，プライバシーは守られることや回答は成績と無関係であること，答えたくない質問には答えなくてよいことを担任教諭が口頭で説明するとともに質問紙の表紙に明記した. その上で, 協力に同意した児童のみ回答した. なお, 調査に際して前所属機関の研究倫理審査委員会で承認を得た.

3. 結果

3.1 体験活動の因子構造の検討

東京学芸大学（2012）で作成された自然・社会体験 17 項目について因子分析（最尤法,

プロマックス回転）を行った結果，3 因子が得られた．因子数の決定に際しては，スクリープロットや解釈可能性から総合的に判断した．回転後の各項目の因子負荷量は表 1 に示した．「体の不自由な人やお年よりや困っている人の手だすけをしたこと」，「木を使ったものづくりをしたこと」「キャンプのように家族とはなれて泊ったこと」，「体育の時間以外で運動をしたこと」の 4 項目は，共通性と因子負荷量ともに低かったため，除外した．第 1 因子は生き物の飼育や花や野菜を育てるなどの飼育や調理・裁縫の内容で構成されたため，国立青少年教育振興機構（2021）に倣い「生活体験」と命名した．第 2 因子は地域の行事や清掃活動への参加などの地域社会での様々な活動に関する内容で構成されたため，「社会体験」と命名した．第 3 因子は「海，山，湖，川などで遊んだこと」や「山登りをした」などの項目が高い負荷を示したため，「自然体験」と命名とし，以降の分析を行うこととした．

表 1　体験活動に関する因子パターン行列（最尤法，プロマックス回転）

項目		*M*	*SD*	*F1*	*F2*	*F3*	h^2
F1：生活体験							
11	ほうちょうを使って調理をしたこと	3.201	0.708	**.664**	-.001	-.005	.437
6	花を咲かせたり，野菜を育てたりしたこと	3.045	0.781	**.660**	.048	.226	.620
5	生き物を育てたこと	3.267	0.645	**.617**	-.130	.174	.393
12	編み物や裁縫（さいほう）をしたこと	2.847	0.823	**.617**	.116	-.213	.438
F2：社会体験							
17	地域の行事に参加したこと	3.099	0.846	.141	**.724**	-.147	.646
16	文化や伝統にふれたこと	2.876	0.753	-.061	**.577**	.155	.337
7	小さい子どもと遊んだり，お世話をしたこと	3.094	0.832	-.203	**.520**	.197	.228
14	家の手伝いをしたこと	3.079	0.749	.261	**.486**	-.120	.434
9	清そう活動（草取り・ゴミ拾い）へ参加したこと	2.812	0.794	.132	**.434**	.058	.288
F3：自然体験							
1	海，山，湖，川などで遊んだこと	3.282	0.636	-.034	.213	**.678**	.522
3	夜空いっぱいの星を見たこと	2.901	0.835	-.046	-.019	**.671**	.432
2	山登りをしたこと	2.752	0.908	-.009	.069	**.600**	.372
4	魚や貝や虫を捕まえたこと	3.144	0.756	.331	-.123	**.450**	.355
因子間相関	*F2*	.592					
	F3	.306	.130				

3.2 基本統計量と尺度間相関

各尺度について α 係数を算出したところ，α= .705～ .922 と概ね高い内的整合性が示された．そのため，学習への動機づけと体験活動は仮定された下位尺度ごとの加算平均を下位尺

度得点とした．なお，自尊感情に関しては松本（2022）と同様に 3 項目の加算平均を自尊感情得点として算出した（表 2）．

表 2　各尺度の基本統計量

	得点範囲	*M*	*SD*	*α*
学習への動機づけ				
内的調整	1-4	2.455	0.959	.922
同一的調整	1-4	3.095	0.773	.849
取入れ的調整	1-4	2.487	0.889	.851
外的調整	1-4	2.392	1.008	.844
自尊感情	1-6	4.347	0.912	.728
体験活動				
生活体験	1-4	3.066	0.591	.743
社会体験	1-4	3.061	0.640	.711
自然体験	1-4	2.952	0.839	.705

続いて，尺度得点間の相関係数を算出した（表 3）．自然・社会体験の下位尺度である社会体験や自然体験は学習への動機づけの内的調整や同一的調整および自尊感情と正の相関を示し，外的調整とは有意な負の相関を示した．生活体験は自尊感情と正の相関を示したが，学習への動機づけとは有意な関連は示されなかった．学習への動機づけと自尊感情では内的調整，同一的調整，取入れ的調整と自尊感情との間に有意な正の相関を示し，外的調整と自尊感情は有意な負の相関を示した．

表 3　各尺度の尺度間相関

	1	2	3	4	5	6	7
学習への動機づけ							
1.内的調整	—						
2.同一的調整	.332***	—					
3.取入れ的調整	.057	.191**	—				
4.外的調整	-.295***	-.171*	.213**	—			
5.自尊感情	.402***	.361***	.276***	-.196**	—		
体験活動							
6.生活体験	.010	-.057	-.071	-.041	.181*	—	
7.社会体験	.320***	.190**	.018	-.204**	.443***	.316**	—
8.自然体験	.570***	.358***	.037	-.226**	.394***	.028	.407***

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

3.3 体験活動が学習への動機づけや自尊感情に及ぼす影響

体験活動が児童の学習への動機づけや自尊感情に影響を及ぼすという観点から，3 つの体験活動と学習への動機づけおよび自尊感情との関連を検討した．学習への動機づけと自尊感情を目的変数，体験活動の下位尺度を説明変数として重回帰分析を行った（表 4）．その結果，自然体験から内的調整に対する標準偏回帰係数（$\beta = .521, p<.001$）と同一的調整に対する標準偏回帰係数（$\beta = .332, p<.001$），外的調整に対する標準偏回帰係数（$\beta = -.174, p<.05$）は有意な影響が示された．また，社会体験や自然体験から自尊感情の標準偏回帰係数（社会的体験：$\beta = .315, p<.001$；自然体験：$\beta = .267, p<.001$）は有意な正の影響が見られた．さらに，社会的体験は内的調整に対する標準偏回帰係数（$\beta = .123, p<.1$）と外的的調整に対する標準偏回帰係数（$\beta = -.143, p<.1$）は有意傾向であった．また，いずれの分析においても多重共線性の指標となる VIF は 1.126～1.341 であり，問題を示す経験的な基準である 10 を下回るものであった．

表 4　体験活動の重回帰分析の結果

	学習への動機づけ				自尊感情
	内的調整	同一的調整	取入れ的調整	外的調整	
自然･社会体験					
1.生活体験	-.043	-.093	-.086	.009	.073
2.社会体験	.123†	.083	.046	-.143†	.315***
3.自然体験	.521***	.332***	.033	-.174*	.267***
R^2	.335***	.134 ***	.009	.003	.259***

$^{\dagger}p<.10$, $^{*}p<.05$, $^{***}p<.001$

4. 考察

本研究では，小学 6 年生を対象に体験活動が自尊感情や学習への動機づけに及ぼす影響を検討した．以下では，体験活動の心理・学習効果について述べ，最後に本研究の限界と今後の課題を示す．

まず，体験活動について尺度構成を確認したところ，生活体験，社会体験，自然体験の 3 つの下位尺度が特定された．自然体験以外の体験活動として新たに生活体験，社会体験が見いだされた．社会体験は文部科学省（2023）で取り上げられている社会体験と文化的体験を含んだ因子であると考えられる．生活体験は国立青少年教育振興機構の調査（2021）においても取り上げられており，本研究で用いた尺度は体験活動を概ね網羅していることが示唆される．

次に，体験活動と自尊感情や学習への動機づけとの関連について検討したところ，自然体験は自尊感情および学習への動機づけの内的調整や同一的調整に有意な正の影響を示し，仮説 1 と仮説 2 は支持された．自然体験が自尊感情を向上させることは，江川・市瀬（2015）

や正親他（2016）の知見と一致しており，ある程度一貫した結果であるといえる．西田他（2005）は，キャンプのような自然体験を達成することによって，エンジョイメントを高め，それらがフィードバックされることでやる気の変容，ひいては自信の高まりに結びつくことを指摘している．この知見などを踏まえると，自然体験は興味・関心や楽しさを引き出し，学習へのつながりを認識できる機会となる．その結果，学習への自律的動機づけに対する波及効果が得られると考えられる．

社会体験に関しては，自尊感情と学習への動機づけとの関連について検討したところ，有意傾向ではあるもののほぼ予測された通りの関連が見られ，仮説 3 と 4 は支持された．社会体験においても自然体験と同様の効果が得られることが示された．本研究で抽出された社会体験は清掃活動や世話，手伝いなど他者と接し，感謝される経験が多い．自尊感情は役に立つ，必要とされていると感じることであるため，社会体験が多いほど他者からの肯定的なフィードバックにより自尊感情が高くなると考えられる．動機づけへの影響に関しては，有意傾向であるものの，内的調整には正の影響，外的調整には負の影響が示されている．社会体験は生活（1 年生・2 年生）や道徳との関連はあるものの，その他の教科との結びつきが自然体験ほど強くないため（文部科学省，2017），学習への動機づけに対する影響はそれほど示されなかったと考えられる．

一方，生活体験に関しては，自尊感情と学習への動機づけとの関連について検討したところ，有意な関連が示されず，仮説 3 と 4 は支持されなかった．調理は家庭生活の中で経験することが多く，他者からのフィードバックを受けることはあまりない．したがって，生活体験は，児童にとって必ずしも自尊感情や動機づけを高めるものではないかもしれない．しかし，社会体験と有意な正の相関が示されていることから，間接的に影響する可能性が示唆される．

本研究で見いだされた 3 つの因子それぞれが，自尊感情や学習への動機づけと異なる関連性を示したことによって，従来の自然体験だけではなく，多面的に体験活動を捉えることの重要性を示唆した．

最後に本研究の課題と今後の展望について述べる．まず，体験活動が心理・学習面に影響を及ぼすプロセスを検討する必要性である．COVID-19 蔓延下における小学生の自然体験活動の影響を検討した遠藤他（2022）では，自然体験がメンタルヘルスや心理的なつながりと有意な関連が示されなかった理由として測定上の課題をあげている．遠藤他（2022）で用いた尺度は体験の具体的な内容の多寡を測定しているのみであり，自然体験により何を感じ，学んだかまでは測定していない．本研究においても体験活動の頻度を尋ねており，その経験への意味づけや学びについては検討していない．組織キャンプ場面においてやる気が変容するプロセスを検討した西田他（2005）では，組織キャンプ体験からやる気変容への直接効果は見られず，成就感と遂行課題の面白さの 2 因子から構成されるエンジョイメントを介した間接効果が示されている．今後の学校教育への体験活動の意義を踏まえると，体験活動の捉え方や教科学習とのつながりなど体験活動と自尊感情や動機づけを媒介する要因につ

いても検討することが必要であるといえる．続いて，学校教育における体験活動の在り方を検討することである．文部科学省（2023）の調査では，家庭主導で社会体験の機会が提供されているのは約半数であることが報告されている．一方，自然体験や文化的体験に関しては経験していない児童は少ないものの経済的な事情等により，家庭主導では体験活動の機会が提供されない場合もあることを示唆してる．本研究においては，経済状況や家庭での経験の有無については検討していないが，社会体験と自然体験，生活体験の頻度に有意な正の相関が示されており，社会体験をしていない児童はその他も体験していないことが窺える．したがって，学校教育において体験活動の機会を提供・充実させることが，多くの児童に心理・学習効果をもたらす可能性がある．自然体験や社会体験，生活体験を学習として捉えるならば，学校教育においては総合的な学習の時間や道徳および生活，理科，社会，家庭科などの教科で行われている学習が該当する．上述したとおり，学習指導要領（文部科学省，2017）では学校の教育活動全体において学校の実情や児童の実態を考慮し，体験活動の充実が求められている．多くの児童が豊かな体験できるよう学校教育の中で体験活動を踏まえた授業づくりが重要な意味をもつように思われる．今後は上述した課題を踏まえ，児童の心理・学習効果を検証し，学校教育における体験活動の在り方を示すことが求められる．

文　　献

青木康太朗・永吉宏英（2003）．長期キャンプ体験における参加者の社会的スキルの変容に関する研究――参加者の特性による変容過程の違いに着目して――　野外教育研究 *6*(2), 1-12.

青島朋子（2008）．質問紙を活用した子どもの心のアセスメント教師編・自尊感情尺度 児童心理，*62*(9), 129-135.

中央教育審議会（2013）．今後の青少年の体験活動の推進について（答申）中央教育審議会 Retrieved June 8, 2023, from https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2013/04/03/1330231_01.pdf

江川 潤・市瀬良行（2015）．野外活動における大学生の自尊感情と気分変化に関する効果 神田外語大学紀要，*27*, 283-295.

遠藤伸太郎・矢野康介・大石和男（2022）．COVID-19 蔓延下における小学生の自然体験活動がメンタルヘルスに及ぼす影響――日常生活における運動時間を考慮した検討――体育学研究，*67*, 657-672.

古荘純一（2009）．日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか――児童精神科医の現場報告――　光文社新書

速水敏彦・小平英志（2006）．仮想的有能感と学習観および動機づけとの関連　パーソナリティ研究，*14*, 171-180.

平野智之・植野友紀子・海野 孝（2011）．組織キャンプ体験が大学生の自己効力感と無気力に及ぼす効果　大学体育学，*8*, 43-54.

井村 仁（2018）. 野外教育研究の動向と課題　日本野外教育学会（編）野外教育学研究法　杏林書院
国立教育政策研究所（2012）．平成 24 年度 全国学力・学習状況調査 調査結果のポイント 国立教育政策研究所 Retrieved June 21, 2023, from https://www.nier.go.jp/12chousakekkahoukoku/02point/24_chousakekka_point.pdf
国立教育政策研究所（2015）．生徒指導リーフ「自尊感情」？それとも，「自己有用感」？　国立教育政策研究所 Retrieved June 5, 2023, from https://www.nier.go.jp/shido/leaf/leaf18.pdf
国立青少年教育振興機構（2021）. 青少年の体験活動等に関する意識調査（令和元年度調査）報告書　国立青少年教育振興機構　Retrieved June 20, 2023, from https://www.niye.go.jp/kanri/upload/editor/154/File/zentai.pdf
草光紀子・上田哲行（2022）．子ども時代の自然の中での遊び経験が成人後の自然への親和性や地域社会への関心・愛着に及ぼす影響　石川県立大学研究紀要，*5*, 29-37.
松本麻友子（2022）．振り返りからみる児童の自尊感情――テキストマイニングによる探索的検討――　第 37 回大会学校カウンセリング学会発表論文集，33-35.
文部科学省（2017）．小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　総則編　Retrieved June 8, 2023, from https://www.mext.go.jp/content/220221-mxt_kyoiku02-100002180_001.pdf
文部科学省（2023）．21 世紀出生児縦断調査（平成 13 年出生児）特別報告　文部科学省 Retrieved June 8, 2023, from https://www.mext.go.jp/content/20230316-mxt_chousa01-000028304_03.pdf
中川もも・岡村泰斗・荒木恵理（2006）．組織キャンプのストレス場面におけるソーシャル・サポートが小中学生の対処行動に及ぼす影響　野外教育研究，*9*(2), 19-30.
中川もも・岡村泰斗・黒澤 毅・荒木恵理・米山絵里（2005）．長期・短期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす効果　野外教育研究，*8*(2), 31-43.
National Environmental Education Advisory Council (2005). Setting the standard, measuring results, celebrating successes: A report to congress on the status of environmental education in the United States. US Environmental Protection Agency Retrieved June 27, 2023, from https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Setting_the_Standard,_Measuring_Results,_Celebrating_Successes_-_A_Report_to_Congress_on_the_Status_of_Environmental_Education_in_the_United_States.pdf
西田順一・橋本公雄・柳 敏晴・馬場亜紗子（2005）．組織キャンプ体験に伴うメンタルヘルス変容の因果モデル――エンジョイメントを媒介とした検討――　教育心理学研究，*53*, 196-208.
西村多久磨・河村茂雄・櫻井茂男（2011）．自律的な学習動機づけとメタ認知的方略が学業成績を予測するプロセス――内発的な学習動機づけは学業成績を予測することができるのか？――　教育心理学研究，*59*, 77-87.
西村多久磨・村上達也（2014）．児童の学校生活満足度と学習スキル，学習動機づけとの関

連　学級経営心理学研究，*3*, 66-74.
西村多久磨・櫻井茂男（2013）．中学生における自律的学習動機づけと学業適応との関連　心理学研究，*84*, 365-375.
岡田 涼（2010）．小学生から大学生における学習動機づけの構造的変化――動機づけ概念間の関連性についてのメタ分析――　教育心理学研究，*58*, 414-425.
正親秀章・平野智之・茅野理子（2016）．組織キャンプ体験が生徒の自尊感情と信頼感に及ぼす効果　宇都宮大学教育学部教育実践紀要，*2*, 235-238.
Roberts, A., Hinds, J., and Camic, P. M. (2020) Nature activities and wellbeing in children and young people: A systematic literature review. *Journal of Adventure Education and Outdoor Learning*, *20*, 298-318.
Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Prinston University Press.
Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-Determination Theory: Basic Psychological Needs in Motivation, Development, and Wellness*. New York: The Guilford Press.
Sowislo, J, F., & Orth, U. (2013). Does low self-esteem predict depression and anxiety? A meta-analysis of longitudinal studies. *Psychological Bulletin*, *139*, 213-240.
橘 直隆・平野吉直（2001）．生きる力を構成する指標　野外教育研究，*4*(2), 11-16.
橘 直隆・平野吉直・関根章文（2003）．長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響　野外教育研究，*6*(2), 1-12.
竹田レイ子・倉戸ツギオ（2003）．自尊感情が学校内不安に及ぼす効果研究　日本心理学会第 67 回大会発表論文集，1142.
東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（2023）．子どもの生活と学びに関する親子調査 2022 ベネッセ教育総合研究所　Retrieved June 22, 2023, from https://berd.benesse.jp/up_images/research/oyako_tyosa_2022.pdf
東京学芸大学（2012）．成人の道徳性と子どもの頃の体験に関する調査報告書　学校・地域と連携した総合的道徳教育プログラム推進本部　Retrieved June 8, 2023, from http://www.u-gakugei.ac.jp/~kokoro/databank/data/report_2012seijinno_wp.pdf
Waschull, S. B., & Kemis, M. H.（1996）．Level and stability of self-esteem as predictors of children's intrinsic motivation and reasons for anger. *Personality and Social Psychology Bulletin*，*22*, 4-13.
渡邉 仁・飯田 稔（2005）．キャンプ経験による女子高校生の自己概念の変容過程　野外教育研究，*9*(1), 55-66.
横山正幸（2010）．子どもの自尊感情と体験の関係　生活体験学習研究，*10*, 53-62.